



世界初!草原マラソン体験記

大草原を 走ってみました! in モンゴル vol.2

旅行が大好き、CU編集部M。
自慢の八重歯と八方美人を武器に、モンゴル国際マラソン21キロコースに挑む!
※ここは最終日に宿泊したチンギス・ハーン村付近の丘。



小さな出会いがいっぱい 雨の草原マラソン

前回まで
モンゴルの草原を走るという世界でも稀有な大会に出場。モンゴルならではのアバウトな進行に微笑みつつ、草原を走る。順調にゴールを目指していたものの、途中で雨が降り出し雷まで鳴りはじめた。果たしてゴールできるのか…?

はるかかなた、豆粒ほどの大きさに見えるゴールゲートを目指し、雨と雷の草原を走っていた。何より心配なのはウエストポーチに入れているコンパクトカメラ。濡れて壊れたら草原の写真はどうなるの? ダサくても走りにくくてもしょうがない。ウエストポーチをスパッツの中へと押し込んだ。短パン・スパッツ・ウエストポーチという3つの壁で防御して、それでも壊れたらカメラはここで没する運命だったと思う。

雨が降り始めると、車が頻繁に通る過ぎていく。どうやらマラソン大会に参加していたモンゴル人たちが、自宅に帰っているようだ。通り過ぎるときには乗っている人全員が窓から身を乗り出しながら「ガンバレ!」と応援してくれる(ように見える)。徒歩で帰っている小さな女の子が、ガッツポーズをしてくれたこともあった。言葉は通じなくても心は通じるものなんだなあと、ビシビシヨになりながら感動。

家畜を追う遊牧民を遠くに見ながら走っていると、ようやく前を行くランナーが見えてきた。大柄な男性で、



雨の草原ラン。前を行くランナーの背中がようやく見えた。

時折足をさすりながら、ゆっくり走っている。「足、大丈夫ですか?」と背後から声をかけた。振り返った彼はモンゴル人。日本語わからないか…と思った瞬間に、彼が絞り出すような声で言った。

「み…みず…」
みず? ああ、水! 彼の視線は私が持っているミネラルウォーターのペットボトルをまっすぐにとらえていた。全部飲んでいいよ、と差し出すと、一気にごくごくぐくと飲み干した。

「ワタシ、日本語わかります」
ひと息つけたところで、モンゴル人の彼が日本語で話し始めた。国際機関で働いていて、英語は通訳もできるレベルなのだそう。「でも日本語はまだダメ。下手だから」と言うけれど、会話には全然困らない。しばらくの間、彼のペースに合わせて走りながらいろんな話をした。マラソン大会に参加した理由や仕事のこと、モンゴルのこと、日本のこと。雨も雷も気にならない

え用に借りてくれたバンガローへ避難する。無事完走した人もいれば、雨&雷のために緊急発車したという救護車に収容されたという人も。目印のない草原で天気が悪いと不安も増すし、雷も危険だから仕方ない。しばらくすると、最後のランナーがゴールしたという知らせがあった。日本人男性2人が最終ランナーとしてゴールしたとき、バスに乗り込んで帰ろうとしていたモンゴル人たちがバスから駆け降りて、握手やハグで迎えてくれたそう。なんて素敵なマラソン大会だろう。

れた。そして、その先にはツアーのお世話をしてくれているトラベルあさひエージェンシーの近さんの姿。
「完走おめでとうございます! 写真撮りますよー」
天気とは裏腹の明るい声にほっとした。草原マラソン、完走。

□

悪天候のため前倒しになった表彰式(上位入賞を期待された鬼塚さんは準優勝でした!)のあと、いったん着替



ゴール! 近さんが撮影してくれた記念写真。



21キロコース参加の渡邊さん。雨のなか笑顔でゴール。
表彰式には優勝賞品の馬が登場。準優勝は九電工の元陸上部、鬼塚さん。

そんなエピソードに水をさすようだけれど、私にはずっと気になっていることがあった。それは「なんかすごい楽に走れたんですね?」これってほんまに21キロ? というまさかのコース設定への疑問。楽だったなあ、やっぱり撮影したり楽しく話しながら走ったりしたからかなあ、なんて思っていると、レース後の交流パーティーである参加者から情報もたらされたのだ。

「これ、21キロなかったね。GPSだと16キロちょつとくらいよ」
：え!? そんなことってありますか? 準優勝の鬼塚さんと「結果は多分5位」というアバウトな回答をくれた外村さんにも恐る恐る聞いてみる。

「今回のコース、21キロなかったんですね?」
この質問に、ふたりとも笑い出した。鬼塚さんが
「そうでしょうね。もしこれが21キロなら、僕は今日世界記録を樹立したことになります」
と云えば、
「それなら僕は、生涯目標を達成しますね」
と外村さん。何人かの話を総合すると、21キロコースは実は16・6キロ程度だったようだ。距離については、スタートゲートを置いた後「多分この辺が折り返し」というモンゴル人の感覚におまかせしているというウワサも。でも真相はどうであれ、深刻に考えることではない。このアバウトさに誰が憤慨しているだろうか。実際の距離もタイムも、ほとんどの参加者にとってあまり重要ではない。大切なのは記録より記憶。それがモンゴル国際マラソンなのだから。



パーティで振る舞われたモンゴル料理、塩ゆで肉。

モンゴル人は豪快に素手で肉をちぎる! 外村さんも豪快に…ナイフで切ってくれました。



モンゴル人学生のアンバー君が持っているのは、モンゴルのウオッカ。
レース後の交流パーティ。草原ではさすが、急ぎょ屋内で開かれた。



草原の丘を登る。緩やかそうに見えてかなり急な斜面。



ようやくたどり着いた丘の上からの眺め。まさに大草原!

この日がモンゴル最後の夜。みんなでごはんを食べた夕食会や、その後開かれた民族舞踊楽団のミニコンサートはとても楽しかったし本当に素晴らしかった。でもそれ以上に心に残っているのは、食事の後の二次会だ。「二次会は私のゲルでしますよ」という近さんの声がけに、思わず笑ってしまった。二次会って(笑)。こんな旅行、初めて。マラソン大会、街歩き、オブションツァーで出会った現地の子どもの話。夜遅くまで、それぞれのエピソードトークが弾んだ。最後はモンゴル人学生た

□

マラソン大会翌日のフリータイムは夕方まで。夕方にはバスで近郊の町ウインドワルドプ方面へと移動する。チンギス・ハーン村のツーリストキャンプがこの日の宿だ。宿泊するゲルに荷物を置いて、すぐそばの丘に登ってみた。簡単に登れると思っていたのに、急斜面と草に覆われた岩場が行く手を阻む。何度も心が折れそうになりながらも、ようやく丘の上へ来た。大都会ウランバートルからわずか20キロほどの場所だけど、目前に広がるのは打って変わって大草原。こんなにも変わるんだなあと不思議な気持ちになる。下から登って来る人たちが見えたので「おい」と手を振った。手を振り返してくれた彼らが丘の上まで来たとき、「手を振ってくれたのを見て、頑張っ

9月。中旬になって、モンゴル人学生のスーちゃんから「ウランバートルに初雪が降ったよ」という連絡があった。研修で忙しい日々を送っているという近況報告がうれしかった。それから、下旬にはツァーを担当してくれたトラベルあさひエージェンシーさん経由で完走証が届いた。えっちらほっちら船便でやってきたという完走証を見て、大雨の草原マラソンを懐かしく思う。

来年も7月にあるであろうモンゴル国際マラソン。「予定どおりに事が進まないのは我慢ならない」という人には決して勧めません。でも、ほかでは体験できないようなマラソン大会ツァーであることは、間違いない。アバウトでミステリアスな大会。興味のある人は、トラベルあさひエージェンシーさんのHPやブログをチェックです! (トラベルあさひエージェンシー」で検索)

□

「なんだかサークルの合宿みたい」誰かが言うのと、みんなが「本当だ」と笑った。モンゴル国際マラソンのツァーは、これで終了。次の日は早朝に起きて、朝6時20分の飛行機で関空へと飛ぶ。空港まで見送りに来てくれたモンゴル人学生たちと別れるのはさみしかったけれど、ツァーがあまりにも楽しかったので笑顔で別れることができた。

ちの恋愛観についての話が盛り上がり、いろんな人が全員の前で恋バナを披露させられるというイベントに発展。新婚さんの出会いから結婚にいたるまでのドラマみたいな物語を聞いたときには、大興奮だった。「なんだかサークルの合宿みたい」誰かが言うのと、みんなが「本当だ」と笑った。



スファートル広場には大勢の人が集まっている。



ガンダン寺の中。ずらりと並ぶマニ車を回しながら進む。



チベット仏教寺院のガンダン寺。多くのモンゴル人が訪れている。



ガイドしてくれたノムちゃん(左)、街歩きの達人と化した岡村さん(右)。



モンゴルにも顔出し看板が! チョイジンラマ寺院博物館で一枚。

大都会ウランバートルと大草原でのゲル宿泊

マラソン大会の前日と翌日はフリータイムだった。広島県からひとりで参加の岡村さんに声をかけてもらい、一緒に街歩きに出かけた。まるで無計画の私とは違い、岡村さんは初日の夜の夕食会でモンゴル人学生に街の見どころを聞いてくれていた。私はヒナのようにビョビョと後を付いていく。チベット仏教の寺院であるガンダン寺、モンゴル最大のノミンデパート、政府宮殿前のスファートル広場、モンゴルの歴史や生活がよくわかるモンゴル国立博物館、実際に使われていた宮殿のボグドハーン宮殿博物館…。後半1日はモンゴル人学生のノムちゃんがガイドをしてくれたこともあり、事前に教えてもらった観光スポットはすべて回ることができた。ウランバートルが想像以上に大都会だったことが印象的。市内を一望できるザイサン・トルゴイという丘に立つと、遠くまで建物が続いている。「人口の半分がウランバートルに住んでいる」という学生の話も大げさじゃないなあ。

さて私には、気になっていたモンゴル料理がある。テレビ番組で白鵬関が作っていた「ボーズ」(肉餃子のようなもの)。家庭で千個単位で作ることもあるんだって。これは、ノムちゃんが案内してくれたお店で食べることができた。ただ、使われていた羊肉には想像以上に臭みがあって、一口食べて涙ぐむ。「泣いてるじゃない! 大丈夫?」と岡村さんに心配されてしまったけれど、それもまたいい経験ってことにしよう。



モンゴル在住でモンゴル国際マラソン大会事務局の近 彩さん、トラベルあさひエージェンシーさん。楽しい旅をありがとうございました。



マラソン大会当日の7月21日が誕生日だったふたりに、サプライズでパースデーケーキが登場。



夕食後に開かれた民族舞踊楽団によるミニコンサート。一番手前の人が使っている楽器・馬頭琴は本当に馬の鳴き声に聞こえた。



露店で買ったアイス。どことなく青梅のような味。モンゴル版ミルクティ。味付けは塩とバターで甘味は全然ない。



食べてみたかったボーズ。羊肉以外の挽肉を使うこともあるそう。



モンゴル料理のツォイワンは、油多めの焼きうどんのよう。

モンゴルのお土産をプレゼント

1 フェルトで作られたポシェット(1名)

※たて9.5cm、横12cmのミニサイズ。



2 骨占いセット(1名)

※骨占いとは、羊の腰の骨でできたサイコロ4つで運勢を占うもの。4面の形が違って、馬・ラクダ・羊・ヤギと呼ぶ。転がして出た面の割合で占う。英語の解説付き。



お名前・年齢・ご住所・連絡先・ご希望のプレゼント番号を本文に記入し、件名を「モンゴル」としてinfo@cucu.tvまでお送りください。(応募締切:2013年11月13日)



ゲルで行われた二次会。知り合ったばかりの人たちとは思えないほどの盛り上がり。



二次会では、モンゴル人学生と彩さんから歌のプレゼント。



市内あちこちで起こる大渋滞。車で移動の場合は渋滞に巻き込まれること必至。



ノミンデパート前の公園は家族や若者たちの憩いの場。



ザイサン・トルゴイから見るウランバートル市内。ずっと向こうの山まで建物がぎっしり!